



◆ 新年のご挨拶

新年あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

中央教育審議会での学習指導要領改訂に向けた議論が本格化し、学校教育が「何を大切にし、どのように学びを組み立てるのか」が改めて問われています。デジタル教科書をめぐる議論もまた、その中核に位置づくテーマだと感じています。

こうした検討の中で示されているのが「論点整理」です。今後の議論で何が焦点になるのかを整理した資料であり、学校現場の実践をどこへ向けて磨いていくのかを考える際の手がかりにもなります。その中から、デジタル教科書の活用と切り離せない「情報活用能力」の章を取り上げたいと思います。論点整理では、情報活用能力を各教科等における探究的な学びを支える「基盤」として位置づけています。同時に、デジタル化社会の負の側面への対応も含め、学校の教育活動全体の中で、望ましいバランスで育成すること、そして自然体験・直接体験といった「リアルな学び」との調和も重要だという視点が示されています。

さらに、情報活用能力を小・中・高で積み上げるための見取り図として、一定の時間を確保して内容を着実に育成する方向性が提示され、小学校では総合的な学習の時間に「情報の領域(仮称)」を付加する案、中学校では「情報・技術科(仮称)」の検討など、体系化に向けた提案が示されています。また、探究の基盤となる情報活用能力を、①情報技術の活用(中核)／②適切な取扱い／③特性の理解として整理し、とりわけ「活用」を核に据える考え方も明確にされています。

デジタル教科書は、紙の教科書の単なる置き換えではありません。読み上げ・ルビ・動画連携・書き込みや共有といった特性を適切に生かすことで、子どもたちの主体的な学びを支える土台になり得ます。だからこそ、デジタル教科書の活用を「便利さ」の議論にとどめず、探究を前に進めるための情報活用能力(活用・取扱い・理解)を、学校のカリキュラムの中でどう育てるのかという論点と一体で考え、実践知と研究知を往還させていくことが、今まさに求められていると考えます。

引き続き、本学会は、学校現場の先生方、研究者の皆様、そして教育の未来を支える企業の皆様とともに、デジタル教科書を通じた学びの可能性を探究してまいります。

また、本年の年次大会は、花園大学を会場に8月22日・23日の2日間、第15回年次大会(京大大会)として開催いたします。ぜひスケジュールをご調整いただき、ご参加・ご発表をご検討ください。

本年が、皆様にとって新たな学びを切り拓く一年となりますよう、心より祈念いたします。

日本デジタル教科書学会 会長 広瀬一弥

◆ 第15回年次大会(京都大会)の開催について

今度こそ、京都へ年次大会にお越しください！～立場を超えた議論の場を～

皆様におかれましてはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。平素は、学会の諸活動にご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、2026年8月22日(土)23日(日)に第15回日本デジタル教科書学会年次大会(京都大会)を、京都市右京区にございます花園大学にて行うこととなりました。

本学会の京都大会は第5回を京都産業大学で行ったのち、コロナ禍においてオンライン(第9、10回)、京都大学でのハイブリッド開催(第11回)と催してきました。その間、大会実行委員として苦慮した私としては、コロナ禍ゆえに、最後まで自粛しながらの開催であったことを悔しく思っておりました。今回、その苦しい時期を乗り越え、今度こそ皆様に京都の地にお迎えできることを大変嬉しく思っております。

コロナ禍における年次大会の運営は苦しいものでしたが、この時期における各学校の先生方のご苦勞こそ大変であったかと思えます。学校という組織の維持にも負担がかかり、導入ありきではいけないと思いつつもデジタル機器・教材を使うのが精一杯な状況に何度も追い込まれ、さらには自身の生活の基盤さえ揺るがされる時期ではなかったかと思えます。もちろん、その学校を支える企業の方々や、今この時しかできない研究を遂行された研究者の皆様、それら全体を支えた教育委員会や文部科学省をはじめとした行政の皆様も、内容は違えどデジタル化の波に翻弄された時期であったかと思えます。

本学会の良さは、現場の実践者も、研究者も、企業関係者も、行政関係者も、デジタル教科書に関する実践・研究であれば、フラットな目線で議論できるような場を提供できていることにあると考えております。そして、デジタル教科書をめぐっては、立場を超えて話すべき話題が多数ございます。

直接的には、今年の大会において教科書研究センターの新津様が示された、紙の教科書とデジタル教科書をどのように組み合わせしていくか、という問題がございます。そのための議論は、AIの激しい発展によって大きく左右されるでしょう。その基盤となる次期学習指導要領の議論も進んでいます。

デジタルやAIとの共存する社会において、学校が何を守り、何を教えるべきか、その教材の中核に位置する教科書はどうあるべきか、現場ごとに異なるであろう最適解をどのように実現するか。

こういった止めどなく押し寄せる問いを前に、本大会が様々なステークホルダーをフラットに結びつける場を提供できるよう、全力で取り組んで参ります。皆様と今度こそ京都でお会いできることをたのしみしながら、ここにご挨拶とさせていただきます。

日本デジタル教科書学会 事務局長・大会実行委員
久富 望(花園大学)

本大会の詳細スケジュール、参加申込方法、プログラム募集要項等は、学会公式ウェブサイト (<https://kyoto2026.js-dt.jp>) にて随時更新いたします。ご質問やご要望がございましたら、遠慮なく事務局までご連絡ください。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

◆ 研究会報告

研究会名：D-project 香川 JSDT 冬セミナー 2026

日時：令和8年1月11日

会場：情報通信交流館 e-とびあ・かがわ

参加人数 学会員数 4 名 一般参加者数 70 名

研究会概要：

1. 開催趣旨と概要 2026年1月11日(日)、サンポート高松「e-とびあ・かがわ」にて「D-project 香川 JSDT 冬セミナー」を開催した。中央教育審議会による2030年度からのデジタル教科書本格導入方針や、香川県における県統一アカウントの活用本格化を控え、「NEXT GIGA」に向けた教育課題の解決を目指し、日本デジタル教科書学会との共催で実施された。当日は山陰地方を中心とした大雪の影響により、一部の講師やスタッフがオンライン参加への変更を余儀なくされたものの、会場には一般・企業関係者合わせ70名以上が集い、極めて熱気ある会となった。

2. 実践報告および講演内容 午前の部では、丸亀市立飯山北小学校の植田拓人教諭より、総合的な学習の時間における「学校変革ストーリー」が報告された。校舎建て替えを見据え、福祉を軸に「自分たちができること」を主体的に探究する児童の姿と、それを支える教師の仕掛けが提示された。続いて、松山市教育委員会の小田浩範指導主事より、教育DXに向けた共同調達や研修の具体的検証について講演があり、自治体レベルでの先進的な取り組みが共有された。

午後の部では、日本デジタル教科書学会の稲田健実副会長が、デジタル教科書のアクセシビリティについて登壇。色・読み上げ・整理などの多角的な視点から「選ぶのは子ども自身である」と強調し、体験を通じた合理的配慮の重要性を説いた。聖学院中学校高等学校の山本周教諭によるワークショップでは、「AX(AIトランスフォーメーション)時代」をテーマに、Google Gemini や NotebookLM を活用した業務効率化と授業再設計が提案され、参加者は次世代の働き方を体験した。

3. 基調講演と対談 終盤には放送大学の中川一史教授による基調講演が行われ、デジタル教科書推進ワーキンググループにおける最新の審議状況や課題が明快に解説された。締めくくりとして、国際大学 GLOCOM の豊福晋平教授とメディア教育研究室の今度珠美代表理事が、デジタル・シティズンシップをテーマに対談。生成AIの活用倫理や児童生徒への指導の在り方について、深い洞察が示された。

結びに代えて本セミナーは、協賛企業各社によるワークショップも併開催され、理論と実践の両面からNEXT GIGA への指針を探る有意義な機会となった。今後、デジタル教科書の普及と活用に関する研究がさらに深化することを期待したい。

◆ 学会誌「日本デジタル教科書研究」への投稿募集

デジタル教科書研究の投稿論文を随時募集しています。一般論文、展望論文、実践論文の3つのカテゴリーがありますが、実践論文を積極的に評価しています。原著論文ほどの厳密さがなくても、実験段階の理論を実践的に応用した研究、新しいアイデアの実践的検証等を報告論文として積極的に評価します。もちろんアカデミックな一般論文、展望論文も歓迎します。

デジタル教科書研究の詳細については、学会ウェブサイトをご覧ください。

<https://js-dt.jp/2013/12/3354/>

論文の投稿、お待ちしております。

デジタル教科書学会編集委員長 山口大輔(流通経済大学附属柏中学校)

◆ 実践研究論文化支援プロジェクトの参加者募集

研究委員会では、ICT活用教育の優れた実践の公開をサポートしています。「学術研究として実践を公開したいが、学会発表や論文執筆の方法がわからない」という方がいらっしゃれば、ぜひご連絡ください。学術研究の専門家である本学会所属の研究者が協力することで、学会発表や論文執筆を支援します。

詳細はウェブサイトをご覧ください。

https://js-dt.jp/supprt_project-2/

デジタル教科書学会研究委員長 稲田健実(福島県立相馬支援学校)

◆ 研究プロジェクト・研究グループへの研究費助成について

日本デジタル教科書学会では、会員の研究活動を支援するために、研究プロジェクト・研究グループへの研究費助成を行っております。

会員の皆様の積極的な応募をお待ちしております。研究プロジェクトへの助成額は最大10万円、研究グループへの助成額は最大5万円です。研究プロジェクトでは本学会論文誌への投稿と本学会年次大会における発表、研究グループでは本学会年次大会における発表を求めるなど、応募の条件があります。詳細は学会ウェブサイト(http://js-dt.jp/research_support/)をご覧ください。申請は随時受け付けております。ただし、本学会の研究助成に関する年度予算額の上限に達した時点で受付を終了いたしますのでご了承ください。皆様の積極的な取り組みを期待いたします。

◆ 研究会開催助成について

日本デジタル教科書学会では、会員の皆様の主体的な研究会の開催支援、研究活動の活性化、研究の発展、会員相互の連携を促進すること等を目的に、研究会開催助成を行っております。申請に関する詳細は本学会ウェブサイトをご確認ください。会員の皆様の積極的な応募をお待ちしております。（本学会サイトトップページ上部の“学会への申請一覧”の“研究会開催助成について”をご覧ください。申請書もこちらからダウンロードして頂くことができます）
(http://js-dt.jp/seminar_support/)

◆ 会員の声 Vol.6「自律的に学ぶ」 (埼玉県宮代町立須賀小学校 小内慶太)

令和3年度、文部科学省の実証事業により、本校にも国語科の学習者用デジタル教科書が導入されました。4月当初、同僚の中には「文章は紙で読むほうが頭に入る」「効果的な使い方がわからない」と懐疑的な声もありました。しかし半年ほど経つころには、教職員や児童の間で「なんとなくデジタルもいいね」という感覚が共有されるようになっていました。手応えはあるものの、その理由はよくわからないままでした。



衝撃的だったのは翌年のこと。事業が単年度実施のため、デジタル教科書が継続使用できないということでした。どうにか継続使用ができないかと訴えるべく(どこに訴えるのかもよくわからないまま)校長を中心に職員が一丸となって継続を願い、県教育委員会の視察も受けました。最終的には町教育委員会の尽力により使用を続けることができましたが、「なぜ必要なのか」を十分に語れないもどかしさが残りました。この経験から研修制度を活用し、多くの学校や実践者、そして研究者から学ぶ機会を得ました。

実践を見たり、研究指導をいただいたりすることを通し、デジタル教科書は「どう使わせるか」を工夫する対象ではなく、「子どもをどう学ばせるか」を問い直す契機となりました。実践の中で感じていた手応えを言語化し、本学会での発表を通して理論的に整理する営みが評価されることは、大きな励みとなりました。

日本デジタル教科書学会での学びは、公立学校で働く私にとって大きな支えであり続けています。発表や議論を通して、デジタル教科書やデジタル学習基盤を、自律的に学ぶための環境として捉える視点を得ました。学会で得た知見を校内で共有し、実践を問い直し続ける日々の中で、担任した子どもたちが「わたしたち、国語が得意だから」と言って卒業していく姿を見ることができたことは何よりの喜びです。これからも、実践と研究を往還しながら、「研究者としての教師」を目指すべく歩みを進めてまいりたいと思います。